

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	蒲田観梅路上の話 : 雑録
Author(s)	化々山人
Citation	龍南會雜誌, 35 : 33 - 38
Issue date	1895-04-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4547">http://hdl.handle.net/2298/4547</a>
Right	

## 蒲田觀梅路上の話

是篇は十二年前の舊作に係る

化々山人

癸未の歲、春ささらぎの四日、朝、友人西村時彦より、手紙おこせて、今日正午より、蒲田の梅見む、と思へども、あの頃は、囊中拂底にありて、甚困却致居候ゆゑ、足下只今金五拾錢ばかり無之哉、午後推參可致候まゝ、何卒借してくまられたく候、同伴は、荻野由之と申者にて、今大學古典科に居る人あり、其人温厚の人にて、詩歌をも好む。足下も、閑あらば、同遊して、可あり、といひおこせける。午後になりければ、時彦、果して來りて、金を促す。余囊中を探りて、やう／＼に五十錢調へて、借與へけをば、喜ひつゝ、同遊を促す。この日、弘文學舎の事に付き、草鹿甲子太郎、古屋武次と相會して、相談最中にて、痛く斷りたれど、百忙を排して行く、とは、此時あり、といへば、何事も、二氏に任せて、午後二時、草鞋竹杖、飄然といで、大學にゆき、荻野氏を呼出だし、しばし待居て、いよく途に上りしは、やがて、三時なりけり。余始て荻野と交を結び、路上三人、燒芋を食ひつゝ、路人をも憚らず、高聲にて、互に思ひ／＼を談りつゝ、彌次北八、と出かけたるぞをかきさ。先づ最初の話は、詩の話にて、我々どもも、詩を作らざるにも、あらねど、一体、思うて見れば、我等日本人にて、唐の詩を作るは、愚とやいはむ。詩は性情を發する者にて、その用は、人の性情を感動せしめんがためなり。いはゆる天地を動かし、鬼神を泣かしむ、とは詩歌みなこの一徳を備ふる者あり。されば、歌をよむも、詩を作るも、人を感動せしむるこそ、詩歌の妙徳あれ。詩を作りて、人感動せずば、何の益かある。今、歌は、我邦固有の物あれば、言ふと、皆歌ならずといふことなし。因りて、歌をよむことをえ知らぬ者も、賤しき身うへの者も、將た女わらはの幼き者でも、その耳にあれば、やがて、感動をおこして、怒る者も、笑ひたりぬるなり。然れども、今、詩を作りたりとて、詩を知れる者こそ、感情をおこすため。知らざる者に至り

ては、猫に小判なり。何の感情かたこるべき。まして、何にもわからぬ韻字をひねぐり、平仄をならぶるなど、尤もをこのわざとやいはむ。この道理によりて、詩を作りても、平易解しやすきやうに作らば、やだも寸益あらむ。奇抜とか、雄渾とか、何とかいひて、詰屈聲牙の詞をあらべ、或は昔の事迹などといひくるめて、互にはめあひするは、笑草の種あり。頼山陽などは、常に韓蘇などの詩を賞し、白樂天の詩などを、一文錢の値あきやうに、いひくだし、肉あれども、骨あまとか、いひけるは、我等の服せざる所あり。詩は、いはゆる情操に係るものあれば、柔ある時は、骨あきもよし。剛き時は、骨あるもよし。うの時の感情に、剛柔あまをば、その詩に剛柔のあるは、理の當然なり。故に樂天の集中にも、盡く骨あき者のこにもあらず。言ふ所の体、古の体に似たらば、古体と言ってよからむ。今の体に、似たらば、今体と言って嫌ひあるまじ。古体を好むの、新体を好むの、と境をつけて、ことごとくしいひのゝじるは、をこのたは言にて、抑も詩歌の本意を過りし者とやいはん。故に歌詩を作らば、成丈、性情を直捷して、人の感ずるやうにするが、第一の簡要あり。後世の詩は、飾りていふ故に、その人の性情を觀ることあたはず。古人は、飾らぬ故に、うの人の善惡を察すること。人も亦見て感ずるなり。故に詩を作るは、歌をよむに如かず。もし詩を作らば、白樂天の風に作るべし。韓蘇の様に作るは、一人の慰めあり。衆人の慰めにはあらず。それがいやとならば、詩を作らぬぞよき。つまらぬ事に、骨折るは、第一、時間の不經濟なり。と一人がいへば、不經濟の詞のしりを取て、いつしか、經濟の話に談じ及ぶ。世間よ、大事ある者は、經濟なり、一家の夫婦、經濟を知らざれば、うの家破る。一國の君臣、經濟を考へざれば、その國亡ぶ。故に今日西洋の碧眼兒が、爭て經濟學を講ずるに論なく、支那の毛唐人に於ても、五帝三王の時代の書をみれば、利用厚生の道を、第一にいはざるはあし。書經は、堯舜禹湯文武の

政事上の心得を載せたるものあり。その書を開て見れば、貨食は、八政の第一番にあり。此によりてみれば、堯舜などの群聖人は、皆天下を實際に扱てゐたる人ゆゑ、世の中の甘きも、酸きも、よく知り給ひて、人の一揆を起すも、盜賊の多くあるも、皆衣食住に窮するからの事、と知り給ひし故、その言ふ所、一として利用厚生之道あらざるはあし。管仲なども、さすが政事家にて、實際に人民を取扱たる人故に、衣食足而知禮節といひしあり。味ある詞あり。唯管仲のみならず、支那漢唐以來の名君賢臣は、皆その言ふ所、實際の事を離れざりしが、彼の座上空談の腐儒に至りては、常より利をいふことをさうひ、識者の目よりみれば、論語などは、大抵政事家の心得書にて、その中に教育上の談などの雜れる者にて、多くは、利用厚生之道を言へりと思はるゝに、儒者の談する所は、大に異あり。何事やらん、分らぬ不理窟をつけて、仁義々々と、一も二にも、陳々の事のこと、口に唱へて、その方法の經濟が立つざる上は、仁義も行れざるの原則も知らず。つまり仁義を行ふやうにする方法を知らぬ、座上の空論あり。されば、疊の上にのみ居て、仁義を講ずる腐儒と、實際に事を執てみたる政事家の見る所と、はれのつから、淺深の別ありて、政事家の見る所は、別に一隻眼を具ふる者と見ゆ。宋の趙普、論語半部をもて、太祖を輔け、半部を以て太宗を輔けし、と言傳ふるも、宋儒の見る所のやうなる修身一科に限りしが如き者にあらず。趙普は、政事家の目を以て見たるゆゑに、何事も、皆天下を治むる要訓とあり、只一身一己を修むる者のやうに見えざりし、と見えたり。といへば、一人しかりく、我が加藤清正公などは、論語の托孤寄命の一章のみを取て、それにて、太閤薨去の後、秀頼公を輔翼せられし、これも亦その理にあらざるはあし。されば、英雄豪傑の悟入する所は、繁雜ある事のいらぬ者にて、世の中の繁雜ある學問は、皆その人の指配する機關とあるあり、と物しりがほに、いひ出づきは、さてく話

がれもしろくありてきぬ、我これに就て、又たもはくあり、いはん。古人時務を知るは、俊傑にありといへり。清正公の如きも、時務を知るといふべきあり。何にといふに、太閤薨去せらるし後は、天下雲の如くに擾れ、内には石田治部などの徒あり。外には、諸侯の徳川家康公は歸する勢あり。是の時に於て、誰ぞや、太閤の家業を維持え、秀頼公を輔佐せむの忠誠を抱く者は。されば、托孤寄命の一章こそ、眞に是の時の急務ありえ。故に清正公の前田利家公よ、この一章を聞うるゝ、當時の有様、一々身にまゐりたり、さて、今日は、此一章を以て、心肝に銘して、失ふべからざるは、至要の事あり、と思はれし者と、千載の後おでも、感想するに堪へざるあり、と人に行き當るもしらで、語りゆく。この論語の書より、又々支那春秋戰國の事に談うつり、今日に至りて、遠く支那の書を見るに、春秋戰國あたりの書、は寂もろの益あるを覺ゆ。秦以後に至りては、前漢三國及宋の末世の歴史を除き、萬卷の書を見ても、徒勞に屬す。蓋し春秋戰國の時分は、今日歐洲の各國、と毫も變ることなく、只大小の差あるのみあれば、智士勇者、各その智を磨き、その勇を售り、一日も惰弱にして居る者はなく、列國の間に周旋して、彼、奇策を用ひて來れば、我、また妙策を立てゝ、之を制し、我、鄰國を問して、之を取らんとすれば、彼、また吾が後をねらうて、之を奪はんとするあどは、恰も獨逸に於て、陸軍を擴張すれば、佛國は於て、天下無隻の大砲をこしらへ、佛國に於て、よくすれば、英國は、また我劣らじと、海軍を増募して、之に備ふ、と毫も異あることなし。かく互に、すれゝに、富國強兵の策を講して、一日も、氣を休めざる故、その間に生れたる智者勇士の氣象も、たのつから奮ひ立ちて、夫々に學問に勵み、智識を磨き、思ふまゝに、政事にまれ、論理にまれ、道徳にまれ、得る所を言ひもし、書きも傳へけむ。是も、歐洲及我國今日の世に、政事の得失、教育の利害、さては、理學の講究に就きて、論客名士、各思ふ所を演

説に、新聞に、論駁す、と異なることなし。故に諸子百家の書をみるは、實理にても、空理にても、善く事を引き、譬を設け、容易に喩を容るゝこと能はざる様に、論してあるとは、亦盛なりといひつべし。彼の蘇秦など、少き時に、發憤書を讀み、錐にて股を刺し、以て夜學せざるをみて、その時分の氣象、想ふべし。唯蘇秦のみならず、戰國の論客は、大抵少き時、貧乏なる人多し。窮して撓まず、勉強せし者あり。范雎蔡澤などは、皆貧乏人あり。而してその功の赫々たるを、歴史をみて知るべし。且蘇秦などは、學問せざる時は、揣摩の術といふを、最初に講究せし、と歴史に見えたり。この揣摩の術とは、今人は何如ある術ともえ知らざれども、推して見るに、或は今日のロジックやうの學問にやありけむ。蓋し此時分は、遊説の徒を責び、兵戈を免るゝも、その力によれば、その遊説する所は、初は、中々新案奇策を用ひし者多かれしが、後に至りては、智惠袋も盡きたりと見えて、一人兩用、十人同用の淺墓なる説も、多くあれども、先づ遊説は、此頃の欠ぐべからざる者あれば、當時の論客は、皆よくロジックを研究して居たりけむ。今史記などに載せたる、その時分の論説を、今のロジックをもて解剖して見るに、隨分その理を得たる者あり。且戰國時分の論士の譬喩を設くること、その妙境に達し、論中、一波未だ伏せざるに、一波更に起る、層々辯折、毫髪の遺憾なし。その譬を見るに、只古人の事跡を引くのみならず、山川陸海、草木禽獸、何物もよらず、引來りて、事を論ずること、妙あり。その理を推すに、隨分今日の動物植物家の言ふことと事とをいへり。是に就て思ふに、一昧その時分は、上には、暴君暗主、姦官汚吏なども、輩出し、蘇秦張儀の如き、論客は、その間に、周旋もすれど、亦そのやうなる世も、仕ふることを屑とせず、草莽の間に打坐し、書生に教授し、或は獨處潛鑽して、百科の學問を深くはかくとも、隨分研究したる者と思はる。左もかくば、いかでか、かくあるべき。荀子のいはゆる道義重ければ、王

公を輕すといへる、孟子の大人に説くに、その巍々然たるを見るとふかれといひ、又諸侯を藐すといへるは、すべて貴人に説くには、その貴人を先づ吞で、後にあらざれば、迎もその辯舌を働すと能はざるは、ことよりあれば、此等の詞は、只説客の腹氣を吐露したる者なれども、是に就て見ても、上を輕じて、下に隱れ、天人萬物の道理を研究したる者もありとせむはる。莊子なども、荒唐の文あれども、是は時勢を矯めんがために、激言したる者にて、開卷の篇中に、空氣の厚薄、物質の膨脹する理を説ける所など、千載の上にいで、かくはかり窮理せたる者うとぞ怪まる。且諸子百家を、余は好みて讀むに、すべて世間の噂をよくしれること、是亦驚くべし、上は公卿太夫の内輪の事から、下は裏店社會、僻陬混濛の事迄も、ありとあらゆる事、一々書に書きのせてあるは、感心あり。ともかくも、此時分は、やはり今日の雜誌に、新聞に、珍事をかきのせて、世間に弘むるやうに、何事にても、口に述べ、書に著はし、天下に傳へしものと察せらる。畢竟、これを總ぶるに、此時分の言論の區域の廣さによる、と言て可あり。只言論の區域廣さ故に、學者論客、各所見を述ぶることを得たるあり。

(未完)

## 五家庄途の記 (承前)

不老庵主人

四月三日快晴 爐火もいつまか消えて、明け方の寒さは、毛布を通して肌に徹するに、一同夢破れて起きつ、再び薪を焚きて暖を取るに、先きの男も疾く起き出で、何くれとなく周旋す。それだよあるに、五家第一の險路といふ今日の路をば、此男自ら案内し呉れんといふ。いどうれし。昨夜炊きた麥飯にて朝餉したため、搏飯をも製しつ、七時はかりにや此家を辭す。又と來べき處あらねば、幾度か振か